

大東文化大学 東洋研究所所報

2016.12 No.66

目次

『字（あざな）の文化』 田中 良明……………1	第2回講座概要 岡倉 登志……………2
2016年度公開講座「アジアの民族と文化」	第3回講座概要 岡崎 邦彦……………3
第1回講座概要 中村 菜穂……………2	2017年度夏休み公開講座（予告）……………4

字（あざな）の文化

東洋研究所 講師 田中 良明（たなか よしあきら）

「^{あざな}字をつけてください」10月頃にある2年生から頼まれた。突然のことに驚いたが、同時に喜びも覚えた。

漢学を中心とする文化では、成年時に^{いみな}諱（本名）以外の名前をつける風習があり、それを字という。儒教の經典である『儀礼』の士冠礼篇に「冠してこれに字するは、その名を敬へばなり。」とある。冠とは、『伊勢物語』の所謂「うひかうぶり」であり、狭義には元服（成人）の儀式に初めて冠を戴くことを指すが、この元服という言葉も『儀礼』の士冠礼篇に見え、元は冠を戴く頭を、服とはこの儀式によって初めて着る正装を指している。こうした儀式の中で、字もつけられるのである。

親からつけられた諱は両親や君主などの長上の者にだけ呼ばせる名であり、同輩以下の者がその人の諱を口にするには無礼として忌まれたため、他者が呼ぶための名として字がつけられるのであるが、儒教ではこれを親からつけられた諱を他者に呼ばせるのは親不孝だからであるとも考えている。字には様々なつけ方があるが、古典的には諱と関連する文字を用いる例が多いのも、親からつけられた諱への敬意の表れであろう。6世紀の顔之推は、「古は、名（諱）は以て体を正し、字は以て徳を表す。」と言っている。

また様々な理由から諱ではなく字によって呼び習わされることもあり、これを「字を以て^{おこな}行はる」という。字で呼び続けられることが後世まで習慣

化することもあり、四面楚歌で有名な項羽（諱は籍）、唐代詩人の孟浩然（諱は浩）などが日本でも知られた例であろうし、かの蒋介石も介石は字である（諱は中正）。

こうした字の風習は早くから日本にも伝わったが、平安貴族の字は儀礼的なものにすぎず、鎌倉時代には廃れてしまう。それが江戸時代になると儒者・文人たちが字を称し、例えば林羅山は子信、杉田玄白は子鳳、吉田松陰は義卿を字としている。この風習が明治維新後も漢学を修める文人たちによって引き継がれて現在に至っている。戦後に本学の初代学長となった土屋久泰氏は、漢詩人として竹雨の号が知られるが、子健という字ももたれていた。またいまも本学には字をもつ教員がおり、中には字を以て行われる方もいる。

件の学生も、今年成人を迎えるので是非にも字をつけたいとのことだった。「漢学（特に儒教）を中心として東洋の文化を教授・研究することを通じて、その振興を図ると共に儒教に基づく道義の確立を期し、更に東洋の文化を基盤として西洋の文化を摂取吸収し、東西文化を融合して新しい文化の創造を目ざす。」を建学の精神とする本学の学生がこのように字の文化を享受しようとする姿勢は、まさに望外の喜びと言えよう。こうした東洋文化を謳歌する学生の期待には、しっかりと応えていきたい。

公開講座「アジアの民族と文化」

2016年度（第32回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ31名で、各講座の概要は以下のとおりである。

◇第1回 2016年11月10日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階K-0302研修室

テーマ：現代イランの詩をよむ ～20世紀の文学的潮流と言語芸術の試み～

講師：中村 菜穂（東洋研究所兼任研究員、国際関係学部非常勤講師）

イランという国は、近年では厳格なイスラムの国というイメージが強く、日本にとって馴染みの薄い国と思われることが多い。しかし歴史を辿ってみれば、遙か昔、飛鳥・奈良時代にはシルクロードを通じた大陸との交渉の中で、正倉院御物の例に見られるようにサーサーン朝ペルシアの芸術・文化が日本にまで伝えられた事実がある。つい先頃は、奈良でペルシア人役人の名前を記したと思われる木簡が発見され話題になったが、地理的に隔たったかの地との文化的な交流が過去にあったことは思い起こされて良い。

さて、詩の国とも呼ばれるイランの現代詩を知るためには、同地の歴史や、ペルシア語の伝統的な文学の世界を覗いてみる必要があるだろう。サーサーン朝がアラブ・イスラム軍に敗れた後、およそ西暦9世紀から、近世ペルシア語による詩が書かれ始め、やがて百花繚乱ともいふべきペルシア古典文学の時代が訪れた。大詩人フェルドウシーによる民族叙事詩『王書』（11世紀）や、ヨーロッパ、日本にも広く知られたオマル・ハイヤーム『ルバイヤート』（12世紀）、イランでは誰もが詩句を諷んじていると言われる詩聖ハーフェズの抒情詩（14世紀）など、幸い邦訳でも読むことができる。それらの特徴を挙げるなら、比喩や修辭的技巧による華麗・精緻な言語表現が用いられたこと、詩作には韻律のみならず諸学問に関する知識が必要とされたこと、また普遍的な哲理や深遠な思想が根幹にあり、概ね教訓的であったことなどが指摘できるだろう。

イランの現代詩は、こうした伝統文学を背景に成立した。19世紀以降、近代化とともに新しい生活様式や価値



観がもたらされ、現代的感觉を詠う新しい詩（シェエレ・ノウ）が現れる。伝統的な詩に比べて、現実性を重視し、個人の感受性や内面の表現に向かうとともに、定式化した言語表現や韻律規則からの詩の解放を目指した。

代表的な詩人たちとして、現代的な抒情詩において力を発揮したナーデル・ナーデルプール（1929-2000）や「冬」においてイランの社会状況を暗示したメフディー・アハヴァーネ＝サーレス（1929-1990）、女性としての感受性や社会の内的苦悩を鮮烈に詠ったフォルグ・ファロフザード（1935-1967）、東洋思想へ向かい瑞々しい自然を詠ったソフラブ・セペフリー（1928-1980）がいる。これらの詩人たちの詩は、いまでも多くの人に親しまれ、イラン映画をはじめとする他の芸術分野にも靈感を与えている。

◇2016年11月17日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階K-0302研修室

テーマ：タゴール・天心の思想から見る『アジアの民族と文化』

講師：岡倉 登志（東洋研究所 兼任研究員、大東文化大学 名誉教授）

明治から大正を代表する思想家、インドでは詩聖とよばれるR. タゴールと岡倉天心（本名覚三）にスポットライトをあてたが、人種差別反対、平和、自然観で関連深いガンディーにも言及した。二週間前に「東西文化の融合」シンポジウムが開催されたが、タゴールやガンディーも、青年期にロンドンに留学し、西洋志向であったが、科学と精神文化という視点インドとそれを取り巻

くアジア文化、とりわけ芸術を見直した。タゴールにアジアに目を向けるように、ぜひ日本や中国、朝鮮などを旅行するように奨めたのは天心であった。百年前の1916年にタゴールは初来日し、彼がアジア初のノーベル賞受賞者となった三年前に亡くなった同志岡倉覚三の墓参りや講演活動をしながら日本の自然や文化を詩人の鋭い感性で感じ、「日本紀行」を著した（『タゴール著作集』参照）。

岡倉覚三が1902年にインド滞在中に刊行された『東洋の理想』The Ideals of East 冒頭にあるAsia is one「アジアは一つ」が独り歩きしたが、アジアは「個人主義」のインドと共産＝共同主義の中国に二分されるし、中国も儒教の北方と道教の南方に差異があり、日本は「アジア文化の博物館」と分析した。このように民族・文化の多様性、共存を主張している。タゴールがノーベル賞を受賞した『ギタンジャリ』にもその思想が反映されているが、彼が願った一つのベンガルが西ベンガル（インド）とバングラデシュの別の国になったが、両国の国歌はタゴールが作詞したもので、タレントのローラもベンガル語でタゴールの詩を読んでいた。

本日の大テーマであるアジアについても、Asia アジアと East 東洋が使用されているが、これに対応するのは Europe と West である。現在ヨーロッパの統合が崩れかけているが、天心は1887年に欧州調査に出かけた折に、『欧羅巴はひとつではない』と述べていた。一年に及ぶ旅行で言語、芸術（美術や音楽）、宗教、教育、生活感などにラテン文化（その中にもイタリアとフランスなど



の多様性がみられる)、ゲルマン・ケルト文化などの相違点を見出した。また、イタリア・ルネッサンスを絶賛し、1890年代に日本人初の「西洋美術史」の講義をした。それからループルをしっかりとみており、「モナリザ」の最初の紹介者は天心であった。

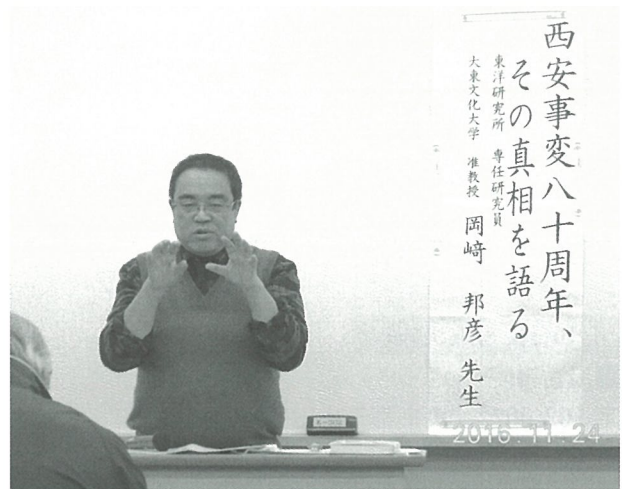
◇第3回 2016年11月24日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：西安事変80周年～その歴史的意義～

講師：岡崎 邦彦（東洋研究所 専任研究員、大東文化大学准教授）

中国共産党は東北軍張学良、西安17路軍楊虎城らへ「抗日統一」、「内戦停止」などを説得し蒋介石から寝返らせ、1936年12月12日の蒋介石に対する「兵諫」（軍隊を蜂起させて主張を受入れさせる）へと追いつめていった。西安事変の勃発である。「兵諫」によって拘禁された蒋介石は、張、楊らの主張を受入れ、中共周恩来の調停によって釈放された。事変後、当時東京朝日新聞の尾崎秀実は、中国民衆の抗日ナショナリズムの高揚を指摘し、日中戦争を予見した。東京大学教授矢内原忠雄もまた中国の抗日激化を論じた。ただし、中共紅軍の動向から中共の対日開戦の主張は「敵本主義」であって、抗日救国よりも当面は蒋介石国民政府の軍事圧力（紅軍を解体し、国民政府へ再編する。中共指導者を海外へ追放する）から脱出することであると見ていた。

西安事変の歴史的意義は、張学良東北軍、楊虎城17路軍による内戦停止、抗日統一などの主張を蒋介石が受け入れ、中共紅軍と内戦を停止し、中国の国民大衆および学界、経済界、華僑、地方の実力派など各団体組織が団結して抗日に備えたことにある。しかし、事変発生当初は、張学良東北軍は内戦を停止し、東北（満州）奪還のために対日開戦を訴えていたが、17路軍内部には東北軍への同情もあったが、軍閥の性格から「反蔣」と陝西における「地盤」を狙っていた。しかも中共紅軍にあっては、矢内原が指摘するように剿共戦からの脱出、生



存が当面の目的であり、事変が起こると蒋介石政権にとって代わろうと画策した。地方の実力派（軍閥）もまた、西安側と「反蔣」で連携を取りながら、政権を窺っていた。さらにソ連、コミンテルンが中共を通じて蒋介石との抗日合作、開戦を求めていた。南京政府内部でも様々な利害関係が渦巻いていた。

こうしてそれぞれの目的、さらには策略から複雑な様相を見せていた。しかし、事変終盤になると指導者蒋介石の救出を望む国民、各団体の運動や団結から、それぞれの糸が撚られて抗日の大綱へと結束していった。事変は、その契機となったのである。

2017年度 夏休み公開講座

東洋研究所では、秋の公開講座のほかに「中国史入門～歴史教科書の先に見えるもの～」として、夏休み公開講座を予定しております。定員は各日 30 名（先着順）、受講料は無料です。

日 程	講 師	テ ー マ
2017 年 7月下旬の土曜日	大東文化大学 東洋研究所講師 田中 良明 <small>たなか よしあきら</small>	中国の文字と名前の文化史 ～名前にまつわる歴史的事件とともに～
～ 8月上旬の土曜日 10:00～11:30	大東文化大学 文学部中国学科特任准教授 小塚 由博 <small>こづか よしひろ</small>	中国文人と書簡 ～清初の交遊ネットワークを中心に～
上記のいずれかの日に、 3名の講師が開講します。	大東文化大学 東洋研究所准教授 岡崎 邦彦 <small>おかざき くにひこ</small>	盧溝橋事件とは、どのような事件だったのか ～盧溝橋事件 80 周年～

■会 場：大東文化会館 研修室（詳細は未定）

■交 通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩 3 分

◆詳細な日程、会場が決定しましたら、追って公表いたします。

■事前の申込が必要です。お問い合わせは東洋研究所事務室までお願いいたします。

2016年度 東洋研究所刊行物

- ・『東洋研究』 200号（2016年7月発行）
201号（2016年10月発行）
202号（2016年11月発行）
203号（2017年1月発行予定）
- ・『イラン研究万華鏡』～文学、政治経済、調査現場の立場から～（東洋研究所研究班編 2016年12月発行）
- ・『Social Transformation and Cultural Change in South Asia』（英文図書）
（東洋研究所研究班編 2017年2月発行予定）
- ・『茶譜』巻九 注釈（東洋研究所研究班編 2017年2月発行予定）
- ・『藝文類聚』巻45 訓読付索引（東洋研究所研究班編 2017年2月発行予定）
- ・『大野盛雄・調査資料コレクション～背景と課題～1（仮題）』（全5巻の予定）
（東洋研究所研究班編 2017年2月発行予定）

刊行図書取扱店

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-5-4
TEL 03-3265-9764

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平 1-10-2
TEL 03-3937-0300

■池上書店（大東文化大学板橋校舎内）

〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
TEL 03-3932-7567

■進明堂（大東文化大学東松山校舎内）

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
TEL 0493-34-4430

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.66

2016年12月25日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL 03-5399-7351 FAX 03-5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>